白山人類学　19 号　2016 年 3 月

特集研究ノート

アソシエーションによるセイフティネット
――パリのグット・ドール地区の例から――

渋　谷　　努*

Voluntary Association Activities Functioning as a Social Safety Net: A View from Goutte-d'Or, Paris

SHIBUYA Tsutomu

Abstract

In this article, I discuss the functions and effects of ADOS, a voluntary association, on second generation immigrants in Goutte-d'Or, northern Paris. Known as an immigrant neighborhood, the area is considered dangerous. In the 1980s, local residents found children playing on the streets until late at night. Worried that the children might turn to crime, the residents established ADOS to provide the children with a safe place to study and play. The children's parents worked irregular and late hours and therefore could not keep an eye on their children after school. In this sense, ADOS' provision of a safe center for the children suited the immigrants' needs.

ADOS also provided remedial tutoring and leisure activities such as going to the cinema and theatre, skating and making videos. ADOS put most emphasis on the leisure activities. By participating in these activities, children experienced a culture other than that of their parents and came into contact with a "French society" different from the one in their neighborhood.

To the second generation immigrants and their parents in Goutte-d'Or, the association did not function for school success but rather provided a social safety net that prevented the children from becoming delinquent and allowed them a minimum level of adaptation to French society.

* 中京大学国際教養学部: School of International Liberal Studies,Chukyo University, 101-2, Yagoto, Honmachi, Showa-ku, Nagoya-shi Aichi, 466-8666/ tsib@mecl.chukyo-u.ac.jp

キーワード：アソシエーション, 移民第二世代，社会適応
Keywords: associateon, immigrant's 2nd generation, social adaptation

は じ め に

本稿では，フランスのパリ 18 区内グット・ドール地区で移民第二世代以降への支援を行っているアソシエーション[1)]のアドス（Association pour le Dialogue et l'Orientation Scolaire 対話と進路指導のためのアソシエーション）の活動が，移民集住地区に住む第二世代以降の子供たちに対して果たしている機能について考察する。

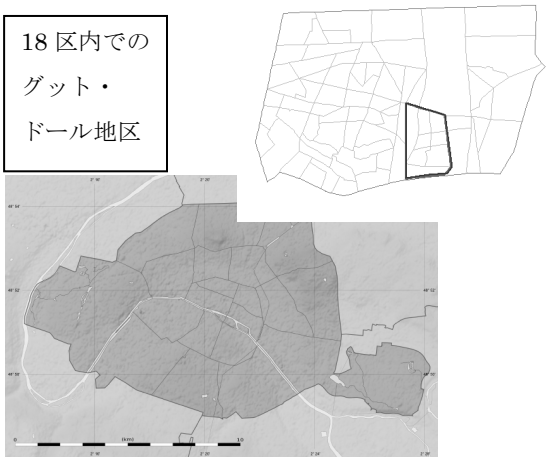

図 1　パリ市内でのグット・ドール地区の位置

教育人類学では，移民などのマイノリティの視点から学校での成績が向上するかどうかを論じている。その中で，学業と社会的地位の向上を出身民族の価値体系の中でどのように評価するのか，それが出身文化と受け入れ社会の規範とが一致しているかどうかで分析する成功の民俗理論がある[山本 2014]。

しかし，移住者は国家内に住むと同時に国家内のある地域に居住し，子供たちはその地域内で社会化していく。国家システムの中での適応（言語など）だけではなく, 地域社会の中で育ちそこでの価値体系を習得しそれに応じて学校などの社会の中で生活していく。その場合, 特定地

1) 1901 年のアソシエーション法（Loi du ler juillet 1901 relative au contrat d´association）によると「2 名以上の者が，利益の分配目的以外の目的のために，自分たちの知識や活動を恒常的に共有するために結ぶ合意」に基づくとされており，広範囲の活動団体がアソシエーションとなる。

域に対して受け入れ社会が付与するある種のイメージが, 彼らの生活や経験の中で形成される自己イメージに大きな影響を与えている[渋谷 2012]。

さらに, 移民の第二世代以降の子供たちは, 出身国での文化や価値観を親や親族から, 場合によっては国境を越えたつながりの中で体得している。彼らは受け入れ社会で生活する中で, 出身文化を変容させながら, 新たな移民による文化を創造していた[渋谷 2006]。そこで, 移民第二世代の置かれた状況を考えるには, 出身地の文化的背景だけではなく, 受け入れ社会の経済的・文化的背景について考慮する必要がある。

本稿で取り上げる受け入れ社会の経済的・文化的背景の一つとして，アソシエーションのスタッフであるアニマテゥールがある。フランスでは，1960 年代に余暇活動が重視されるようになるとともに，余暇活動や民衆教育の活動を活性化するための役割としてアニマテゥールが職業として確立していった。彼らは教えるという教師のような役割ではなく，学習者の持っているものを引き出す役割を果たしている。当時の政府は市民たちが余暇活動を充実させるための施設を建てるとともに，そこに専門教育を受け国家資格を持つ者を配置するようになった。その他には，ハンディキャップを持った人の介助をしたり，老人の介助をすることを仕事とするソーシャルワーカー（travailleur social）がいる[プジョル／ミニヨン 2007: 18-26]。

アニマテゥールやソーシャルワーカーの仕事の中に，1980 年代以降，移民，特に移民第二世代以降へのサポートが含まれるようになった。きっかけとなったのは 1981 年にリヨン郊外で起きた郊外地域に住む移民第二世代を含む若者たちによる，自動車を盗み，暴走し，最後には車に火をつける事件だった。その後，フランス政府は郊外地域に住む若者たちの支援に取り組みはじめた。アニマテゥールやソーシャルワーカーが第二世代以降への支援を行うようになり，夏のバカンス期間にどこにも出かける機会がない若者たちをキャンプに連れて行った[Jovelin 1999: 64-71]。

その後も，政府の後押しもあり，第二世代以降の子供たちを支援するアソシエーションができていった。その中で，アソシエーションにアニマテゥールが正規雇用されることが増えていき，アニマテゥールやソーシャルワーカーが移民第二世代以降にとって職業に関する選択肢の一つとなった。

しかし，ソーシャルワーカーやアニマテゥールの中で移民出身者が占める割合が大きくなっており，「民族化」が進んでいることを指摘する研究者がいる。概して，彼らの仕事は老人介護からもわかるように身体的な負担が大きい。また大学で専攻し国家資格を取っている者はフランス人に多く，移民出身者は資格を必要としない補助的な役割についていることが多い。そのために彼らの雇用は不安定なものになりがちである[Boucher et Belqasmi 2011]。移民第二世代以降は，就職するのが困難であり，他の選択が少なく消極的にソーシャルワーカーの職に就いたと指摘されている[Jovelin 1999, 2008]。つまり受け入れ社会であるフランスの価値観

から考えると，ソーシャルワーカーやアニマテゥールになることは，学校での成績が芳しくなく，その後の職業選択でも思い通りにいかなかった場合となる。

本稿では，パリ市内の移民集住地域住民の中で学業支援がどのように行われ，どのような意味を持っているのか，さらにアニマテゥールになることを含む彼らのライフコース選択に対してどのような影響を与えているのかを明らかにする。それを通して，日本社会も今直面している移民第二世代の教育問題に対して発信をしていく。文化人類学的に現代社会の抱える問題に取り組む意義があると考える。

本稿の元となるデータは，2015 年 2 月及び 8 月に行ったフィールドワークによって得ている。その際には，アドスの活動を観察した。さらにアソシエーションの成り立ちや活動内容に関してディレクターに話を聞くと共に，参加している子供たち，そしてアドスで働くアニマテゥール，またはボランティアの人たちからアソシエーションの活動について話を聞きデータを収集した[2]。

I　グット・ドール地区の住民

グット・ドール地区は，パリの中でも歴史的に労働者が集住してきた地区であり，国内・国外からの移住者が集まったことから「移民の中心地」[Toubon et Messamah 1990]として知られている。労働者集住の地としてはエミール・ゾラの『居酒屋』の舞台となったことで知られている[ゾラ 1971]。「移民の中心地」としては，小説で言えばミシェル・トゥルニエが地区名と同じタイトルの本『黄金のしずく』[トゥルニエ 1996]を書き，ベストセラーとなっている。

グット・ドール地区の住民数[3]は，2006 年の調査によると総数 23130 人であり，外国生まれの外国籍保持者と外国生まれだがフランス国籍を取得した者を含む移民[4]（Immigrés）が 8,641 人（全体の約 37.3%），そのうちフランス国籍を持たない外国人[5]（étrangers）が 8,024 人（全体の約 34.7%）である。年齢別で見ていくと，高齢者がそれほど多くなく 75 歳以上は 694 人であるのに対し，就労人口の年代である 25-59 歳が 1 万 3,000 人と最も多く，全体の 56%を占めている。さらに 14 歳未満が 4,224 人，15 歳から 24 歳が 3,192 人と，2 つの年齢層を合わせた若年層が人口の中で 32%を占めていることがわかる。

2) ただ，今回の調査では，保護者から話を聞く機会がなかったため，親たちがアソシエーションに付与している意義については直接意見を聞き取ることができなかった。親たちの意見を交えたアドスの評価は今後の課題とする。
3) 以下で用いる統計データは，INSEE Fiche "Estimations de population par quartier" 2006 に基づく。
4) フランスの統計では，二重国籍者はフランス人として数えている。
5) 定義上，フランス生まれの外国籍者を含む。

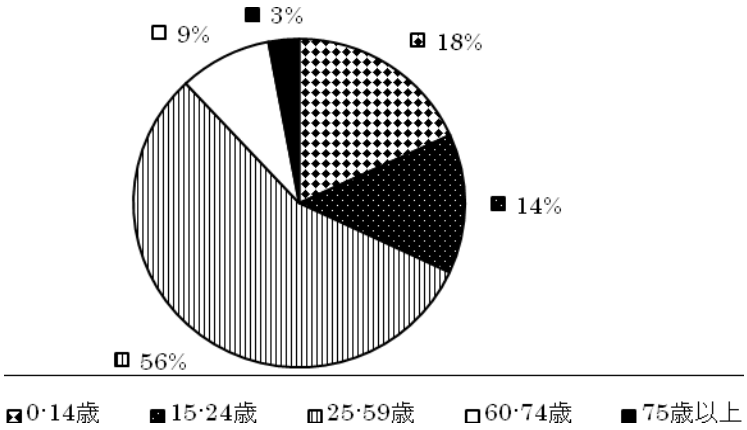

図 2　グット・ドール地区の住民：年齢別

INSEE Fiche "Estimations de population par quartier" 2006 に基づき，筆者作成。

世帯数を見ていくと，総数は 1 万 1,289 世帯であり，そのうち，構成員が 6 名以上の世帯は 415 世帯であるのに対し，一人世帯は 5,492 世帯と多く，全体の 48.6%を占めている。一人世帯のうち 60 歳以上の高齢者による一人世帯は 1,252 世帯で全世帯数の 11%となり，高齢者の一人暮らしが多いことがわかる。片親世帯は 861 世帯であり，そのうち母親のみの世帯が 696 世帯だった。

以上のことから，グット・ドール地区では，年齢別にみていけば，若年層や労働人口の世代が多い地区ということができる。その一方で，世帯別に見ていくと，独居老人の家族や，女性の片親世帯など社会生活にリスクを負っている世帯が多いことがわかる。

次に，グット・ドール地区住民の学歴について見ていこう。INSEE の 2006 年の調査及び 1999 年の調査結果をまとめたのが，以下の表 1 である。グット・ドール地区は，パリ及びその郊外地域の平均と比べても，概ね良い結果となっている。フランスで高等学校レベルの終了認証である BAC より下の学位しか持っていない者は 50.7%であり，パリ及びその周辺地域の 56.9%と比べてもより少ない結果となっている。また高学歴である BAC＋2 以上のものを持つ者も，グット・ドール地区は 31.9%であるのに対して，パリ及びその周辺地域は 26.4%と当該地域では高学歴者が多いことを示している。

ただ，この「高学歴化」は最近の現象ということができ，1999 年の結果と比べると成績が格段とよくなっていることが確認できる。2006 年の調査では 1999 年の調査と比べると，BAC よりも下の学位しかない者の数が 15.3%も減っており，それに対して BAC の学位と同等の学

位を持っている者が 44.5%，BAC 以上の学位の者が 29.2%も増えている。この高学歴化は，地区内に住む外国人にも当てはまり，BAC より下の学位の者の数が減っており（-11.2%），それに対し BAC の学位を持っている者が 61.4%，BAC 以上の学位の者が 30.7%と大幅に増加している。

表 1　グット・ドール地区住民の学歴

15 歳以上の学位に関して	全体	女性	外国人（Etrangers）	パリ及びその周辺地域
全く学位がない，または BAC より下	9,586（50.7%）（-15.3%）	4,428（－18.1%）	4,492（－11.2%）	56.9%
BAC レベルの学位	3,352（17.7%）（44.5%）	1,530（37.3%）	883（61.4%）	16.6%
BAC＋2　それ以上	6,028（31.9%）（29.2%）	2,902（24.5%）	954（30.7%）	26.4%

INSEE Fiche "Estimations de population par quartier" 2006 に基づき，筆者作成

経済面について見てみると，グット・ドール地区は 1999 年の調査で 24%が失業状態，2006 年の段階では微減して 22.1%が失業状態にあり，パリ市の 10%と比べても失業率が特に高いことがわかる。また，現在は警察により取り締まりが厳しくなり見られなくなってきたというが，路上で大麻などを売る売人を見かけることがある。さらにエイズ患者が女性を中心に出ており，彼女たちを支援するアソシエーションもある。このように再開発によって改善されているとはいえ，グット・ドール地区は，歴史的に見てもパリの中での移民の中心地であるとともに，社会的治安の悪さが問題となっている地区である。

II　グット・ドール地区の再開発とアドスの始まり

グット・ドール地区は 1980 年代から，パリの他の地区でも見られた都市再開発の対象となった。老朽化した建物を壊し，商業施設とともに新たな集合住宅を作るという計画だった。そ

れに対し住民側は，再開発後の新たな集合住宅の家賃が上がり，これまでの住人が住めなくなることを恐れて住民運動を始めた。当初は再計画の主体であるパリ市に対して，住民の意識を反映させた計画になるよう再検討を求めるものとして始まった。その後この地区の中でのアソシエーションの動きは都市計画に関わるものだけに留まらず，その他の福祉活動や外国人住民向けの活動を行う団体が生まれていった[Goldring 2006]。

2013 年現在で，グット・ドール地区にあるアソシエーションは数十団体あり，それらの団体をまとめる組織として，サル・サン・ブルーノ（Salle Saint Bruno）がある。この組織には，グット・ドール地区で活動する団体のうち 23 団体が加盟しており，年に 3 回ほど各団体の代表者が集まっている。この組織の設立は各アソシエーションの不満のガス抜きを目的とした市行政府の取り組みであると批判する研究者もいるが[Bacqué 2006]，サル・サン・ブルーノは実質的な機能を現在でも果たしている。集まりでは，それぞれの団体の活動内容について確認し，さらに地区での取り組みの欠けている点を議論している。また，各アソシエーション間の関係を形成する機会にもなっており，団体間の相互扶助関係も見られている。

そのようなアソシエーション結成状況の中で，本稿で取り上げるアドスも生まれた。このアソシエーションは，1987 年に地域住民により始まった。当時，暗くなっても外に出歩いている子供たちがおり，非行につながると心配する住民がいた。そのような子供たちの家庭環境を見ると，親が共働きをしていることが多く，労働を終えてから家に帰るのが遅くなることも多かった。その結果，親が子供の面倒を見ることができない状況が生じていた。そこで子供たちのことを心配した地元住民の中には，非行につながるような温床をなくしたい，子供たちを助けなければならないと考える者が現れ,子供たちの学校を終えた後の居場所を作ることを始めた。

活動を開始した当初は，地元住民のボランティアによって運営されてきた。数年が過ぎた頃に，子供たちの面倒を見る上でより専門的な知識と活動が必要になってきて，専門家としてのアニマテゥールを雇用することになった。

III　現在のアドスの運営

現在のアドスは，ディレクターが現場の長として運営管理にあたり，彼の下に有給職員としてアニマテゥールが 3 人いる。それ以外はボランティア（bénévoles）である。また，予算の決済や活動の監査をする理事会がある。

現在のディレクターは，アニマテゥールとしてアドスの活動に参加した。彼はグット・ドール地区の出身ではないが，17 年間アドスの活動に関り，その後ディレクターとなった。現在アニマテゥールとなっている 3 人も，グット・ドール地区の出身ではなく，子供の頃にアドスに

通った経験もない。3 人とも，大学を卒業し国家資格を持っており，そのうちの二人は他のアソシエーションでの勤務経験もある。

ボランティアの登録者は 60 名程度である。地元の住民やかつてアドスに通っていた受講生の中でボランティアになる者もいる。また，大学生や退職者の中にはグット・ドール地区に住んでいない者も含まれている。また最近の傾向として，当該地区に引っ越してきた経済的に余裕がある者たち[6]がボランティアに加わり始めている。

アドスの運営は，ボランティア，受講生，その親の合意によって決められる。それはディレクターが独断的に決めることはできないことを意味し，フランスの公立学校の運営にも近い民主主義の実践の場となっている。教室の中でスカーフをすることを認めるかどうかが問題となったことがあるが，ボランティアと親たちの話し合いによって認めないことに決まった。

その他に理事がいる。彼らは意見を求められた場合には運営に関して意見を述べ，また活動報告や経済面のチェックをしている。現在のディレクターによると，自分が働き始めた頃にアドスに通っていた受講生が現在では理事の一人になっており，自分が行ってきたことの成果の一つだと述べていた。

アドスは，グット・ドール地区内にある公園のそばの建物の 1 階を占めている。アドスが占める一階部分には 3 部屋あり，そのうち 2 つは学習用，1 つは余暇（loisir）用になっている。学習用の部屋は 7-14 人が入る広さである。余暇用の部屋にはスマートボールなどの遊具も入っており，学習用の部屋より大きい。

アドスへの登録料は年に 7 ユーロである。登録すると受講生は日々行われる学習支援，余暇活動を基本的に無料で受けることができる。また，教室内には，クッキーなどのお菓子やバナナ，リンゴなどのフルーツが置いてあり，紅茶，コーヒーなど飲み物も用意されているが，このような飲食物は無料だった。ただ，夏季や冬季などの長期バカンスの期間には，グット・ドール地区を離れてオペラや映画鑑賞をするときがあるが，その時は，家族への最大の負担は 2 ユーロまでとなっている。それ以上の金額を要求すると支払えない家族が出てくるからである。

アドスの経済的側面を見ると，部屋の賃貸料や職員の給料などが主な支出となるが，余暇活動の参加代の補てんなども含まれる。収入としては，参加している受講生たちからの登録料はそれほど大きなものとはならず，おもに県や国といった行政からの支援と民間企業の寄付や助成金に頼っている。またディレクターの主な仕事は，主に行政や企業への資金集めだということである。

6) いわゆるボボ（BoBo），ブルジョア・ボヘミアンと呼ばれる，ある程度の収入を持ちながら再開発地区に率先して移り住み，地域活動にも参加する者を呼ぶ。ボボに関しては［Wartrin et Legrand 2015］を参照。

IV　現在のアドスの活動

アドスが現在行っている活動は二種類あり，一つには学習支援，もう一つには余暇活動がある。2014−2015 年度の登録者数状況を見ると，学習支援，余暇活動ともに定員いっぱいの 150 名が登録している。登録者の親の出身地を見ると北アフリカ，サハラ以南のアフリカ出身者のみで構成されていた。グット・ドール地区の中にはアジア系の住民も増えているが，彼らが参加することは少ない。アソシエーションのホームページに掲載されている写真を見ると，アジア系の外見を持つ子供が通っている写真を見いだすことができるが，少なくとも当該年度の登録者の中には含まれていなかった[7]。

学習支援の内容としては，基本的には小学校レベルでは学校から出された課題などのサポートをすることが主である。高学年には，要望があった場合にはより高度な内容の学習支援をしている。学習支援活動[8]には，毎日約 15-20 名が出席している。アニマテゥールが 7-8 名ついており，子供たちがわからない問題があると解き方や考え方に関してアドバイスしている。学習用の教室に入ると，右手のスペースには，壁に棚があり，そこにはフランス語の絵本や小説，子供向けの百科辞典や辞書，さらにポルトガル語やスペイン語，英語の絵本などが置かれている。

教室の中では小学生が宿題をし，時には中学生も一緒になって勉強をしていることもある。算数やフランス語など，それぞれの課題や勉強を行っている。子供たちは，教室の中では勉強だけではなく，周りの子供たちと会話をすることもあった。子供たちは，この教室のある場所を「家」と呼ぶこともあった。

余暇活動に関しては，二本の縄跳びで行うダブルダッチのコースがあれば，ビデオの撮影や編集のコースなど予約が必要なコースもある。その他にもアニマテゥールが準備をするものがある。日々の余暇活動の中で何を行うのかは，当日の担当アニマテゥールが約 1 ヵ月前に計画を立てておくことになっている。ディレクターはアドバイスをするのみである。

アドスでは，ホームページに掲載されている団体趣旨によると，活動として学業支援とともに余暇活動を重要視している。アドスに来る子供たち「各人が自分がアクターであるために，おかれた環境をよりよく理解できるようにし，民主主義の練習としてアソシエーションの機能を利用できるようにする」［ADOS（on line）　2008］ことを通して，若者たちが自分の将来を築いていくのに寄り添い，社会生活に参加することに関心を持たせることを目的としている。

---

7) アジア系住民の参加が少ないのは，彼らのニーズとアソシエーションの活動内容にずれがあるのかもしれないが，詳細は今後の課題としたい。

8) 比較として，日本における移民第二世代以降の児童への居場所作りを実践している活動の紹介として［渋谷 2013］がある。

そのために幼児と若者の余暇活動を支援し，さらに地域の活動に参加することがアソシエーションの目的となっている。

若者や家族に向けての活動を超えて，アドスは地理的枠組みの中で自分たちの活動を考えている。そこで，このアソシエーションは地域の活動に積極的に参加し，また他のアソシエーションと連携して様々な企画を立て実現化することで，社会的つながりを作りだし活性化させている。

つまりアドスの中では，学業の成功は学校で習得したものだけではなく，それに余暇活動，さらに民主主義の学校である地域での活動を組み合わせることで花開くと考えている。このように余暇活動を重視するのは，フランスにおける「余暇活動」の理解から影響を受けていると考えられる。余暇活動を社会学的に研究し，民衆教育のための団体「民衆と文化」を設立し，フランスの社会教育に大きな影響を与えたデュマズディエは余暇（loisir）を次のように定義している。余暇を「休息，気晴らし，自己開発」という３つの機能を持つと捉え，自主的選択で行う活動の総体と定義した。そこには余暇活動を通じて「文化活動への大衆の参加，すなわち，科学，技術，芸術などの諸活動や諸成果を大衆が理解し，さらに大衆がますます参加していくことが，社会にとって必要である」と，余暇が社会に積極的参加を促進する機能があることを強調している[デュマズディエ 1972]。

余暇活動とは，休息の意味もあるが，それ以上に様々な余暇的活動を選択し実践することを通して社会への参加を促す。さらにそのような指向性を個々人に習得させる機会と捉えることができる。

このように余暇活動を重視するのは，アドスに限られたものではなく，フランスにおける社会教育の中での大きな特徴と言える。その中でもアドスでは，余暇を若者たちが全体的に開花するために欠かせないものと考えている。そうすることで，外の世界に開かれ，集団経験が可能となる。アドスでの余暇は，外に出かけたりアトリエに行ったりすることで，受講生たちに自分たち，他者，自分たちの環境の発見を促す。社会の問題に関して意見を交換し，討論の形で社会問題に触れるようにすることを目的としている。

当該年度の例でもわかるように，アドスには許容範囲を超えるほど登録者数が多いため，受講生が学習支援，余暇活動に参加できるのは週に二回が限度となっている。そこで，このアソシエーションの活動は，地域住民からある程度の評価を受けており，だからこそ受講希望者が多いと考えることができる。

VI　アドスと学校適応/社会適応

アドスの活動が，学校適応にどこまで貢献しているのだろうか。アドスの学校適応に対する機能について考えてみよう。アドスは，未就学児童の受け入れも行っており，集団生活や学校文化への適応を促すことが予想できる。しかし，学習活動に関しては，宿題の手伝いが主であり，補足としてより高度な学習支援もしているが，それがどこまで子供たちの学習に影響を与えているのかはわからない。

また，アドスのディレクターもそれほど学業成績の効果や向上を目指してはいない。仮に資金が増えた場合でも，学業支援に今まで以上に力を入れるのではなく，新たな余暇活動を増やしたいと答えていた。さらに，父兄からも今まで以上に学業の支援に力を入れるようにという要請を受けたこともないということだった。「勉強をもっとさせたいのだったら，このアソシエーションではなく, 別のところに行かせるだろう」というのが, ディレクターの意見だった。

だからこそ，ホームページやチラシにも成績向上のことは触れていない。また，アソシエーションとしても自分たちの取り組みが子供たちの成績にどのような影響を与えているのかに関して調査なども行っていない。ここから，アソシエーションとして子供たちの学校適応を目標としていないことがわかる。

しかし放課後の居場所を持つことで，子供たちの生活に一つのリズムができる。課題を他の子供たちと一緒にすることで，毎日一定時間の勉強をする習慣を身につけることができる。さらに，フランス語の動詞の活用や慣用表現，フランスの歴史など，家に帰ってから親に聞いても解答が得にくい場合などがあるために，アドスで課題をするようにさせている。このように学習の習慣づけとリズムをつけることは，最低限の基礎学力を定着させるセイフティネットの役割を果たしているだろう。

またアドスは, 学校適応以上に社会適応への機能を果たしていると言える。この地区内には, イスラームの教義を教えるクラスやアラビア語を教えるクラスを開催しているアソシエーションがある。アドスに通っている子供たちの中には，イスラームやアラビア語のクラスに通っている者もいた。それでも同時にアドスに通わせているということから，親たちにとっても，スカーフを着用することを「民主的に」決めていくアドスに通わせることは，宗教的・民族的側面での保持を願いながらも，フランス社会への「適応」に向けた選択の表れと捉えることができる。

このような，学校適応とは異なるフランス社会への適応の例として，幼少時にアドスに通っていた子供の中からアニマテゥールの仕事につく者や目指す者が出ていることがあげられる。

現在，ボランティアとしてアドスの活動に関わっている大学生（セネガル出身の両親を持つ）の男性S氏は，自分が幼い頃から通っていたアドスで出会ったボランティアやアニマテゥールの働き方，生き方に憧れるようになったという。

> 子供たち一人一人に目を向けながら，彼ら一人一人の個性を考えて，何をするのか考える。それによって，今の自分はあるし，それを次の子供たちに今度は自分がしたい。

と，語った。

アドスの中から，ディレクターによるとアニマテゥールなどの職についた者は，まだ数人だという。数としては少ないが，受講している子供たちにとっては，アドスに通うことでフランス社会への適応の一つの例を経験し，それを目指すものが出始めていると言える。アニマテゥールになるということは，フランス社会全体の観点から見れば，優先順位の高い選択ではない。しかし，この「移民集住地区」に住み，アドスに通い，ボランティアをしている第二世代にとっては，アニマテゥールになることは，フランス社会に入る一つのステップになっているとみなされていた。

また，アドスの余暇活動は，受けている子供たちに対して地域社会の中の文化を超えたフランス社会への適応をもたらしている。先述のボランティアのS氏は，自分の経験を以下のように語った。

> この地区を超えると別の世界だった。子供の頃はバスに乗れば，シャンゼリゼにもトロカデロにも行けたのに（バスで乗り換え無しに両方ともに行ける），行けなかった。お金のこともあるけど，あそこは違う場所，違う文化の所。

彼の言葉からもわかるように，グット・ドール地区で生活してきた者の中には，いわば自分たちの地区を回りから閉ざされ壁に囲まれた「村」のように感じている者がいた。既に論じたように，グット・ドールは歴史的に低所得層や移民の集住地域として知られており，治安が悪い危険な地域というイメージに晒されている。そのような，孤立した「村」という自己イメージを持つ住民，特に本稿で取り上げた子供たちにとって，アドスが提供している余暇活動は，地域の周囲にある壁を越える経験を提供していると言える。そしてそれは，学力とは別の観点から見えてくるフランス社会への適応に寄与している。

お わ り に

これまで，パリ 18 区に位置する第二世代以降の子供たちへの支援アソシエーションであるアドスの活動が受講生に対して果たす機能について検討してきた。

アドスが位置するグット・ドール地区は，フランスの中でも移民集住地区であり，治安の悪い「危険」な地区として知られてきた。その中で活動を行っているアドスは，学業支援として子供たちの課題を行うサポートをしている。しかし，それが当該団体の主な目的とはなっていなかった。アドスは学業成果を求めるだけではなく，居場所作りであり，それが非行防止につながっていた。親の中には，アドスに子供たちの学業成績の向上を特に期待することもなかった。親たちには労働時間が不規則または深夜に及ぶ者もおり，公立の学校を終えた後での子供の活動に目が届きにくい場合もある。そのような世帯にとって，子供たちの居場所を提供してくれる場の存在は，彼らのニーズに合っているといえる。

それ以上にアドスでは余暇活動に力を入れていた。余暇活動は，地区の子供たちに対して，「外の」文化に触れさせる機会となっていた。彼らの親の文化とは異なる，新たな刺激を受けることがアドスに通うことで可能となった。それは，居住地域内ではなかなか体験できない「新たな」文化に触れることにつながった。

グット・ドール地区に住む者に取っても，子供の学歴が不必要なのではない。また，失業率の高さが続いている現状から言っても，今まで以上の学歴が求められるのは必要だろう。だが，その一方で高学歴化しても失業率が劇的に減ることもない。学歴が社会移動の手段になりうるという認識は，この地区に住む親たちに取っても実感として納得できるものではないだろう。そこでアドスに通っている子供たちにとってのアソシエーション経験をどのように評価するか。それは学校への適応，不適応では評価できなかった，非行に走らず，フランス社会に触れさせ，社会への適合を最低限のものであれもたらすセイフティネットの役割を果たしていたといえる。

参　考　文　献

［外国語文献］

Bacqué , Marie-Hélène

2006　Action collective,instituteonnalisation et contre-pouvoir: action associative et communautaire à Paris et à Montréal, *Espace et societies*,123: 69-84.

Boucher, MANUEL et Mohamed Belqasmi

2011　L'intervention sociale et la question ethnique, *Hommes &Migrations*, 1290: 22-33.

Goldring, Maurice

2006　*La Goutte-d'Or: quartier de France*, Paris: Editions Autrement.

Jovelin, Emmanuel

1999　*Devenir Travailleur*, Paris: L'Harmattan.

2007　Des travailleurs sociaux par default, *Hommes & Migrations*, 1266: 20-33.

Toubon, Jean-Claude et Khelifa Messamah

1990　*Centralité Immigrée*, Paris: L'Harmatten.

Wartrin, Laure et Thomas Legrand

2015　*Le République Bobo*, Paris: Le Livres de proche.

［日本語文献］

渋谷努

2005『国境を越える名誉と家族』宮城: 東北大学出版会.

2012「『ブール』を通してみる『市民』とマイノリティの境界」『周縁から照射する EU 社会』石川真作・渋谷努・山本須美子（編），87-108 ページ，京都: 世界思想社.

2013「現場から見た多文化共生」『民際力の可能性』渋谷努（編），63-92 ページ，東京: 国際書院.

ゾラ，エミール

1971『居酒屋』古賀照一(訳)東京: 新潮社.

トゥルニエ，ミシェル

1996『黄金のしずく』榊原晃三(訳)東京: 白水社.

デュマズディエ，J.

1972『余暇文明へ向かって』中島巌(訳)東京: 東京創元社.

プジョル，ジュヌヴィエーブ／ジャン＝マリー・ミニヨン

2007『アニマテゥール—フランスの社会教育・生涯学習の担い手たち』石橋恵子(監訳)東京: 明石書店.

山本須美子

2014『EU における中国系移民の教育エスノグラフィ』東京: 東信堂.

［ウェブサイト］

INSEE

2011

Fiche Estimations de population par quartier 2006. Accessed on January 30, 2016. http://www.insee.fr/fr/ppp/bases-de-donnees/donneesdetaillees/duicq/pdf/em/em_Z_1100030.pdf

ADOS

2008　Bienvenue sur le site de ADOS. Accessed　on　January 30, 2016.
http://www.ados-go.org